

参宮みやげ

a souvenir from Jingu

平成 25 年
9・25 [水] - 12・23 [月]

開館時間 九時～十六時半
休館日 十月五日・六日
お問合せ 式年遷宮記念せんぐう館
〒五一六―〇〇四二
三重県伊勢市豊川町前野二二六―一
TEL 〇五九六―二二―六二六三
<http://www.sengukan.jp/>

平成二十五年度企画展示

参宮みやげ

— 神宮に寄せる思い —

いあい

伊勢には式年遷宮を機に作られた記念品や神宮参拝の土産があります。

式年遷宮の記念品や参宮の土産は、全国からの参拝者と神宮を結び付けてきた祈りと願いの証であり、またそれらを作ってきた伊勢の人々の不断の努力に培われた技が見られます。

本企画展では遷宮の記念品や参宮の土産とそれに携わってきた人物を取り上げ、参宮に込められた思いと職人による技を紹介します。

式年遷宮の記念品・参宮土産を通して、神宮に寄せられる祈りと願いを感じ取って頂ければ幸いです。

平成二十五年九月二十五日

式年遷宮記念せんぐう館

目次

ごあいさつ

凡例

目次

一、参宮みやげ

二、正直と伊勢根付

三、三忠と擬革紙

四、神山一三と神路山焼

五、今村仙風とおいせ窯

六、森下木二と五十鈴焼

七、清水石仙と二見焼

八、坂口晴風の彫刻

九、山本翠松の桑名盆

展示資料一覧

主要参考文献

・この図録は平成二十五年九月二十五日から十二月二十三日にかけて式年遷宮記念せんぐう館において開催する企画展示「参宮みやげ―神宮に寄せる思い―」に際して作成したものである。

・図録の資料図版の順は、展示順序を示すものではない。

・展示資料の写真は当館が撮影した。

・本書の編集・執筆は芝本行亮がたった。

一、参宮みやげさんぐう

式年遷宮しきねんせんぐうを契機として参宮者を多く迎える伊勢（三重県）には神宮を題材にした様々な参宮みやげがありました。

これら参宮みやげは陶芸・彫刻・漆工などの多彩な技巧ぎこうを施した「伊勢の工芸」と言えます。展示では参宮みやげ・神宮の記

念品を作っていた「神路山焼」・「五十鈴焼」・「二見焼」といった陶芸、式年遷宮の余材で作った漆工の「伊勢春慶」いせしゅんけい、皇大神宮

（内宮）側で採られる朝熊の黄楊を彫った「伊勢根付」いせねつけ、また参宮で伊勢国の海路玄関かいろうげんかんであった桑名の漆工「桑名盆」くわなぼん、豊受大神宮

（外宮）を目前にした参宮者が小憩した明和の「擬革紙煙草入」ぎかくしただこいれなどを紹介します。



岩戸茶碗 いわとちやわん 明治 神宮徴古館蔵 出口斎吉献納

口縁径十一・五cm 高さ四・二cm 高台径五・六cm

岩戸茶碗は伊勢参宮街道沿いで、参宮者に茶を振る舞う際に使われました。

茶碗の見込みこみに伊勢神宮の杉木立の中に鳥居を描いて、

その背に富士山が見えています。胴部あめのには朱筆で「天

岩戸いわと」と書かれています。



間の山振舞茶碗 明治 神宮徴古館蔵

口縁径十・五cm 高さ四・五cm 高台径五・〇cm

茶碗の見込に「振舞茶」、胴部には「両宮間の山」と書かれています。「間の山」は内宮の鳥居前町である宇治と外宮鳥居前町である山田の間にある山を指した名称です。現在の小田橋から、伊勢神宮のお札を奉製している頒布部がある牛谷坂までの丘陵を指します。



伊勢春慶箱 昭和三年 宇治山田市 個人蔵

縦十七・七cm 横十七・七cm 高さ七・七cm

昭和天皇御即位を記念して作られた伊勢春慶の箱。

蓋の摘みに勾玉形をつけて、蓋裏には

伊勢大神宮御造宮材木切

御大典記念

宇治山田市

と記されています。

昭和天皇の御即位は、昭和三年（一九二八）十一月

十日京都御所において行われ、十一月二十一日、神宮

に御親謁。この御参拝を記念して宇治山田市（現伊勢

市）が伊勢春慶の箱を作りました。箱の木地は翌昭和

四年に遷御の儀を迎える式年遷宮（第五十八回）の

御用材桧を使っています。

二、正直と伊勢根付

根付ねつけは煙草入・銭入・印籠などを紐で腰から提さげる時に落ちないように帯おびで留める留め具として作られた工芸品です。

根付師はその留め具に人物や動物・風景などを木材・象牙・鹿や牛の角つのに彫刻しました。

参宮みやげとしての伊勢根付は、素材となる「朝熊黄楊あさまつげ」が内宮の北東にある朝熊山あさまやまから採られ、全国からの参宮者が無事に

国元へ帰られるようにとの祈りが込められた蛙かえる（帰る）を彫って発展しました。伊勢根付は志摩国鵜方うがたに生まれた鈴木新左衛門すずきしんざえもん

（一八一五～一八九〇）が外宮前の八日市場ようかいちばに移り住み、天保三年（一八三二）より大坂で彫刻修行して伊勢に帰郷。初代正直まさなお

として大成しました。幕末には蛙の根付のほかに刀装具・煙管筒きせる・煙草入たばこいれ、明治に入ってから置物も製作しました。文久元

年（一八六一）、同じく八日市場に住まいした三宅長五郎みやけちやうごろう（一八四八～一九二二）が十五歳で初代正直に入門。初代と同じく蛙

の根付を得意として、「正直まさなお」銘を用いることを許されて二代正直となりました。三代正直は三宅喜三郎（一八九〇～一九四六）

で刀法を父である二代正直より学び、観察・工夫を凝こらした多くの作品を残しています。



伊勢根付 草履に蝦蟇 鈴木正直作 明治

神宮徴古館蔵 川合東臯献納

縦三・〇cm 横四・〇cm 高さ一・八cm

初代正直である鈴木正直（新左衛門）作の根付。

彫刻である伊勢根付は、全国からの参宮者が無

事に国元へ帰られるようにとの祈りを込めて

蛙（帰る）を彫りました。

朝熊の黄楊を用いており、精緻を極めた彫りで

草鞋と蛙が表されています。



釣瓶つるべに蝦蟇がま 三宅正直みやけまさなお 昭和

神宮徴古館蔵 川合東皐かわいとうこう 献納

口縁縦十三・二cm 口縁横十二・二cm
高さ二十・五cm

三代正直まさなおである三宅正直みやけまさなお(喜三郎きさぶろう)の作品。

釣瓶の朽ちた風合いと木釘きくぎ、生き生きとし

た蛙かえると蝸牛かたつむりが彫りこまれています。

三、三忠と擬革紙

参宮みやげの代表は参宮旅行中に使用される雨合羽あまがつばと煙草入たばこいれでした。特に煙草入は一人で二十個・三十提げと買われていく活況を呈して煙草入店は宮川の西岸より参宮街道沿いに百軒ありました。中でも明和めいわの新茶屋たなに店を構えた「三忠」は擬革紙ぎかくしの煙草入を作りました。

貞享元年じょうきょう（一六八四）、三島屋みしまやの堀木忠次郎ほりきちゅうじろうは参宮街道を行く参拝者の為に、革に似た風合いを持つ油紙あぶらがみに改良した擬革紙を考案し、煙草入たばこいれにしました。その後明治に入つて、三忠の擬革紙は金唐革きんからかわに変わる金唐紙きんからかみを生産し、内国勸業博覧会・パリ・バルセロナ・ロンドン・セントルイス・シカゴなどの万国博覧会ばんこくに出展。明治三十三年（一九〇〇）のパリ万博では金賞を得てヨーロッパ・アメリカの宮殿・市庁舎へやかべがみの部屋壁紙として使用されました。

現在、後裔こうえいとなる堀木茂氏ほりきしげるは三重県度会郡玉城町を中心とする「参宮ブランド擬革紙の会」と共に、擬革紙ぎかくしの加工技術を再現、煙草入たばこいれや財布・名刺入れなどを作つて参宮みやげを現代によみがえらせています。



擬革紙煙草入 ぎかくし たばこ いれ 三忠製 さんちゅう せい 江戸時代 個人蔵

縦七・五 cm 横一一・五 cm

擬革紙の煙草入は、ぎかくし「三忠」さんちゅうの三島屋・堀木忠みしま や ちゅう

次郎じろうが全国からの参宮者の為に革に似た風合い

を持つ、軽くて丈夫な油紙あぶらがみの加工技術を発明し、煙草入を作りました。



擬草紙巻煙草入 三忠製 大正 個人蔵

縦一〇・〇cm 横七・〇cm

紙巻煙草は刻んだ煙草の葉を紙で円柱状に巻いた煙草。大正年間に煙管やパイプを使わない紙巻煙草が流行って喫煙の主流になりました。

擬草紙の紙巻煙草入はその流行に合わせて考案されました。



堀革紙巾着 堀革紙の会作 現代 堀革紙の会蔵

口径七cm 底径十四・五cm 縦十九cm

ほりきしげろ

堀木茂氏は長らくわからなかった堀革紙の製法を、平成二十一年に設立した「参宮ブランド堀革紙の会」と共に研究して復元に成功しました。

堀革紙の会では堀革紙のブックカバーやバッグ・帽子などを製作し、本年九月六日、三重県の伝統工芸品の認定を受けました。



擬革紙煙草入 ぎかくしたばこいれ 堀木茂作 ほりきしげろ 現代 個人蔵

縦七・〇 cm 横一一・八 cm

煙草入に使われている「擬革紙」ぎかくしは動物の皮革ひかくに擬せ
た紙のこと。合羽紙かつぱがみ（油紙）に揉み皺じわをつけて顔料がんりょうや
柿渋かきしぶを塗って、革のような風合いを醸かもし出した加工和
紙です。



擬革紙名刺入 ぎかくしめいしりれ 堀木茂作 ほりきしげろ 現代 個人蔵

縦八・五 cm 横十一・〇 cm

三重県度会郡玉城町を中心とする「参宮ブ

わたらいぐんたまきりょう

ランド擬革紙の会」は、擬革紙ぎかくしの加工技術

を再現。参宮みやげとして煙草入たばこいれや財布・

名刺入・巾着きんちやくなどを製作しています。

「参宮ブランド擬革紙の会」で復元された
擬革紙は本年九月六日に三重県の伝統工芸
品として認定されました。

四、こうやまいちぞう神山一三かみじやまやきのかみじやまやき神路山焼

神山一三は（一八六五～一九四四）は慶応元年（一八六五）滋賀県信楽村神山こうやまに生まれ。名は宇之助。号は一三いちぞう。信楽において作陶技術を身につけて、明治二十四年（一八九一）十月二十八日、津市土手の阿漕窯あこぎようを修築しますが、明治三十三年（一九〇〇）経営不振の為に廃窯はいよう。明治三十四年（一九〇一）津市長の長井氏克・社長の内田正雄が経営する阿漕焼陶器株式会社の職長を勤め、二十名余りの陶工とうこうを指導しています。

明治三十七年（一九〇四）内宮の奥山である神路山かみじやまの土を使った神宮の記念品を手掛けました。翌明治三十八年（一九〇五）三月、宇治山田市うじやまだし（現伊勢市）いちしくぼちよう一志久保町に移り住み、岩淵町いわぶちちようきんすいばし錦水橋近くに築窯しますが、同年四月に倭町やまとまちの倭姫御陵南側に五室の登り窯を築いて「神路山焼」かみじやまやきを興しました。主に参宮土産の盃や德利・湯呑、土瓶をつくりました。大正六年（一九一七）五月五日、南勢陶器品評会で建水けんすいが三等を受賞。茶陶をも手掛けて、表千家十三代即中斎そくちゆうさい（一九〇一～一九七九）に引き立てられ、昭和十五年（一九四〇）に作られた即中斎直書じしがきの茶碗も幾つか残されています。神路山焼は昭和十八年（一九四三）、政令の企業整備により廃窯はいよう。一三は翌昭和十九年（一九四四）八十歳で逝去しました。



神路山焼 岩戸茶碗 神山一三作 昭和

神宮徴古館蔵 永井六三郎献納

口縁径十一・八cm 高さ四・四cm 高台径五・〇cm

茶碗の見込に伊勢神宮の杉と鳥居を描き、奥に富士山が見えています。皇大神宮（内宮）の北東にある朝熊山は富士山が見られる最西端で、快晴の折には山頂より伊勢湾の遠景に富士山が見られます。茶碗の胴部には朱筆で「天岩戸」と書かれています。



神路山焼 剣先祓小碗 神山二三作 昭和 個人蔵

口縁径五・五cm 高台径二・二cm 高さ三・〇cm

皇大神宮（内宮）のお札「剣先祓」を小碗の見込に描いた小碗。「剣先祓」の背後には、朱筆で「参宮紀念」と角印風に書き添えています。



神路山焼かみじやまやき 徳利とっくり 神山二三作 昭和 個人蔵

口縁縦二cm×横二cm 底部径七cm

高さ 十三・五cm

胴部には伊勢神宮の杉木立すぎこだちに鳥居を描き、鳥居には神鶏しんけいがとまっています。

底部の脇には「神路山」の判形かまいんの窯印が付けられています。



神路山焼茶碗「神光」 神山一三作 昭和 個人蔵

口縁径十三・三 cm 高さ七・七 cm 高台径五・六 cm

茶碗の胴部に表千家十三代即中斎が「神光」と揮毫しています。

高台脇には「一三」判と「神路山」の丸判があります。箱書は三

重県松阪の茶人横山宗顕（一八七三〜一九四五）の手によるもの

で「神路山茶碗、即中斎直書、神光とあり、機叟顯（花押）」と

書かれています。即中斎は伊勢神宮で皇紀二六〇〇年を奉祝して

献茶を行っています。献茶式は昭和十五年（一九四〇）、神武天

皇御即位から二六〇〇年を記念して林崎文庫で行われ、皇大神宮

（内宮）に奉納。家元席は如雪園（現神宮会館）に設けられまし

た。茶碗はこの時に使用されたものです。即中斎は自ら神路山焼の

茶碗の胴部に「神風」や「瑞雲」「神楽」「旭日」などを揮毫し、

花押を添えて、神山一三に焼かせました。

銘「神光」は『碧巖録』第九六則、趙州三
転語の頃の一句に「神光天地を照らす」の
禅語がありますが、即中斎はその語をもじ
って「神光照五十鈴川」の一行書を認めて
います。天照大御神の御威光が世を照らし
て、繁栄していることの意味を持たせてい
ると考えられます。



五、いまむらせんぷう今村仙風のおいせ窯がま

今村仙風は明治二十一年（一八八八）十月、長野県下伊那郡座光寺村（現飯田市）善光寺屋敷生まれ。陶芸は大正の始め瀬戸あおいがまの葵窯に遊んだことが始まりで、その後にしざわなんかいに西沢南海の指導の下、五年ばかり楽焼らくやきを試みています。仙風は酒造業をやめた昭和二年、加藤陶寿かとうとうじゆの指導を仰ぎ、善光寺葵窯ぜんこうじあおいがまの名前で創業。その後愛知県豊川とよかわ、ついで岡崎おかざきで窯を開いて後、昭和十年代に宇治山田市じやまだし（現伊勢市）に移り住み、間あいの山で「おいせ窯がま」の名で楽焼を始めました。昭和三十年、神宮如雪園内じよせつえん（現神宮会館）に「神宮窯じんぐうがま」を創窯そうよう。その「神宮窯」の初代陶工として迎えられ、神宮の記念品や参宮みやげを製作。作陶四年して病を得て退職しますが、病癒えて再び「おいせ窯がま」の名で自営の窯を始めています。昭和三十六年、旧知を頼って岡崎市大樹寺境内だいじゆじに築窯ちくよう。昭和四十年、七十八歳で生涯を閉じました。



暦手茶碗こよみでちやわん 今村仙風作いまむらせんぷう 神宮窯じんぐうがま 昭和 神宮徴古館蔵

口縁径十一・五cm 高台径四・五cm 高さ七・五cm

寛政十一年（一七九九）の伊勢暦を描いた茶碗で「暦手茶碗」と呼ばれています。

寛政十一年には、十二月十九日に橋姫神社の新殿還座。

同月二十一日には宇治橋の造替竣工して、渡始式が執り行われています。

この暦手茶碗は、昭和二十四年（一九四九）十一月三日に行われた宇治橋渡始式を記念して作られたものと思われます。高台脇に「神宮窯」の丸判窯印が押されています。



御絵付茶碗 北白川房子祭主御絵付 今村仙風作 昭和

神宮徴古館蔵

口縁径十二・七cm 高台径五・三cm 高さ七・二cm

茶碗は軟質の施釉陶器で、手で成形する「手捏ね」と呼ばれる手法で作られています。

北白川房子祭主が茶碗の見込に松葉、胴部に松が枝を絵付けされています。

茶碗はほぼ均等な厚みをもたせてたんねんに削り上げています。総体に掛けられた白釉はよく溶けて光沢があります。腰をやや高く上げて、丸味をもって大らかに広がっています。口部はわずかに抱え込まれており、口縁には起伏をつけています。高台脇には「仙風作」とへら書きがあり、平らな畳付きには目跡は見られません。



「大祓詞」鉄筆竹柱掛

今村仙風刻 倭姫宮蔵

昭和三十二年（一九五七）

縦一一九・〇cm

横八・〇cm

厚み三・〇cm

大祓は全国神社で六月と十

二月の晦日に行われる罪や穢

れを祓い清める神事。この

「大祓」の神事に際して

奏上される文言が大祓詞

です。

鉄筆は先端が鉄でできている

筆記具です。版面などの作品

で彫りこみや浮き彫りにした

り、作品に自署する際に用い

られます。

六、森下木二の五十鈴焼

森下木二（一八六一～一九二五）は文久元年（一八六一）七月一日、尾張国常滑で施釉陶器を作っていた陶工森下木二（初代・本治郎）の三男として生まれています。通称は今三郎といい、号は二代木二。父・初代木二の業を受け継ぎ、また村瀬太乙・守田宝丹に書を習い、梅甫という俳号をもち俳句も嗜みました。明治三十年（一八九七）十一月、三重県安芸郡黒田で植木鉢製造に従事し、明治三十三年（一九〇〇）四月には、神山一三の招きに応じて津市枕町阿漕焼に入ります。明治三十八年（一九〇五）二月、阿漕焼陶器株式会社が廃窯した後、小島兼次郎の小島阿漕にしばらくいましたが、のちに津玉置町に移り住み、楽焼を作る陶友会を組織しました。明治四十一年（一九〇八）十月、宇治山田市（現伊勢市）新町に移り住み、神宮司庁（現神宮道場）の対岸に石炭窯を築窯しますが三年で廃窯。五十鈴川のほとりの西行谷に登り窯を築いて「五十鈴川焼」を開窯します。後に「川」を略して「五十鈴焼」と呼びました。大正八年（一九一九）八月、息子の出征（第一次世界大戦）の為廃窯し、故郷の常滑に帰りました。



五十鈴焼 焼締水指 森下木二作 昭和

神宮徴古館蔵 永井六三郎献納

口縁径十五・六cm

高さ十六・五cm (塗り蓋二・五cm含)

水指は茶道具の一つで、釜に足す水と茶碗や茶筌を
すすぐ為の水をたくわえておく器です。

この水指は無釉で焼き締められており、底部には
「五十鈴木二作」とヘラ書きしています。



五十鈴焼 水碗形茶碗「神路山」 森下木二作 大正七年 個人蔵

口縁径十二・七cm 高台径七・〇cm 高さ六・〇cm

大正七年（一九一八）、祇園新地甲部歌舞練場の第五十回都踊の記念として「五十鈴の調」を開催。その記念品として、神饌の御水を捧げる神宮の土器「水碗」を模した茶碗が造られました。三室戸和光大宮司が「五十鈴川水にうつれるかげにさへ清くもみゆる杉のむらたち」と和歌を寄せて、茶碗の胴部には竹内栖鳳が描いた神苑の杉の元絵と落款印。茶碗の銘は裏千家十三代圓能斎鉄中が皇大神宮（内宮）の山「神路山」と付けて、高台底部に「いすずやき」の印判があります。箱蓋内には「大神宮御水碗形 栖鳳画伯案杉之図 銘神路山 今日庵（花押）」と圓能斎が書き記しています。箱蓋表には「五十鈴焼茶碗」の墨書と「歌舞練場」の丸判があり、箱身の底には「五十鈴」の勾玉判が捺されています。



七、清水石仙の二見焼

清水石仙（二代）は明治八年（一八七五）六月二十二日、岐阜県赤坂（大垣市赤坂町）の清水石僊せきせんの長男として生まれる。

父より陶芸を学び、石仙は造形・絵画に優れていました。特に呂洞賓図・四睡図・寒山拾得・虎溪三笑図などの禅機画ぜんきがを朱泥しゅでい

茶器に彫刻した作品があります。明治四十年（一九〇七）に二見に移り住んで開窯かいよう。二見焼の作品は、全国からの参宮者が宿

泊した二見浦ふたみうらの旅館街でみやげ物として販売されました。石仙（二代）は昭和十四年（一九三九）に六十四歳で亡くなってい

ます。その後、三代石仙せきせんが後を継ぎましたが昭和十八年頃に廃窯しました。



二見焼 神宮古印釣瓶花入 清水石仙作 昭和

個人蔵

口縁径十一・七cm 底径八・〇cm 高さ十・〇cm

朱泥の赤みを帯びた地肌に神宮古印と蟹を刃物で刻んで描かれています。

神宮古印は「内宮政印」「豊受宮印」があります。

いずれも平安時代の古印を模しています。

釣瓶の底部には「石仙」の二字が刻まれています。

八、坂口晴風の木彫さかぐちせいふう もくちよう

坂口晴風は、明治三十一年（一八九八）十一月十一日、富山県高岡市たかおかし生まれ。富山県立工業学校木彫科もくちようかに入学。在学中にサンフランシスコ万国博覧会ばんこくに出品して三等賞。同校木彫科卒業後、奈良に留まって研鑽を積んで、その間に作品がイギリス皇太子・スウェーデン皇太子の台覧たいらんの栄に浴しています。昭和三年（一九二八）天皇・皇后の伊勢神宮御親謁ごしんえつの際に天覧てんらんの栄に浴し、併せて御買上げの栄を賜りました。晴風はその後、三重県度会郡玉城町田丸わたらいぐんたまきちやうたまるに住まいして、昭和七年（一九三二）第七回構造社展に入選。以来会員・無鑑査・審査員と進み、昭和二十九年（一九五四）・昭和三十二年（一九五七）には日展にってん（日本美術展覧会）入選など作品を多く出品。昭和三十九年（一九六四）には県展審査員けんてんになっています。昭和四十三年（一九六八）十二月十九日、七十歳で逝去せいきよしました。



宇治橋擬宝珠香合 うじばしぎばしこうごう 高倉篤麿大宮司箱書・坂口晴風刻 昭和

神宮徴古館蔵 永井六三郎献納

縦五・五 cm 横十一・五 cm 幅五・〇 cm

昭和二十四年（一九四九）宇治橋渡始式が執り行われており、坂口晴風は昭和四年に造られた宇治橋桧材で宇治橋擬宝珠を模した香合を作りました。香合には実物さながらに

御裳裾川

御橋

天照皇大神

元和五年己未

奉行

丹波守

源直信

田丸住

晴風作

と銘文が刻まれています。御山杉みやますぎの箱蓋には「宇治橋の古材を以て造る 篤麿（花押）」と記されています。





宇治橋古材茶器「五十鈴川」 坂口晴風刻 慶光院俊箱書

昭和 個人蔵

口縁径六・五 cm 高さ八・〇 cm

昭和四年（一九二九）に造られた宇治橋の橋脚樫材でつくられた茶器。坂口晴風は茶器の蓋に十六弁の菊花を彫り、花の中央に「神宮」の丸判を残しています。

この茶器は昭和二十四年（一九四九）に執り行われた宇治橋渡始式を記念して作られたもので、箱蓋甲書に「茶器、神宮古材」と慶光院俊禰宜（当時）が書かれており、箱蓋内書に茶器の銘を「五十鈴川」と記しています。

九、山本翠松の桑名盆

海路で伊勢参宮すると伊勢国の入り口になるのが、港のある桑名です。桑名には伊勢国の海の玄関口として「伊勢国一の鳥居」が建てられ、昭和四年式年遷宮（第五十八回）からは内宮の宇治橋鳥居（外側）の古材で建てられています。

桑名盆は文政年間（一八一八〜一八二九）に桑名藩主松平定永の父、松平定信（樂翁）が宋の朱子が著した『小学』外編「善行第六」に採録された汪信民の言葉「嘗て人、常には菜根を咬み得ば、則ち百事做すべし」との質素儉約の意味を持たせて、谷文晁に蕪の絵を描かせた桑名盆を將軍家に献上しました。この事が評判となり、蕪の絵が描かれた会席膳や菓子盆が数多く作られて、桑名盆は伊勢参宮のみやげになりました。

『久波奈名所図会』にはオランダ人が桑名盆を買い求めている挿絵があり、日本のみやげとしても喜ばれました。

現在、山本翠松氏は桑名藩御用塗師を勤めた小川興六の小川家を伯父方として、その六代にあたり、江戸時代以来の「イジイジ塗桑名盆」の姿を再現製作し、三重県指定伝統工芸品となり、その技術と技法を守り伝えています。



桑名薄盆 くわなうすぼん 六代 山本翠松塗 やまもとすいしょう 現代

式年遷宮記念せんぐう館蔵 平成二十四年献納

口縁径二十一・〇cm 高さ二・三cm

漆塗りは見付が木地呂塗り仕上げ。木目の美しい塩地（モクセイ科の落葉高木）を使って、砥の粉で塩地の目止めをした後に漆を載せています。縁には桑名盆の特色である「イジイジ塗り」という波紋を塗り出した変塗りが青漆で施され、外縁に朱漆を置いています。かぶら絵は寛政の改革を推し進めた松平定信が質素倏約の意味を込めて、谷文晁に蕪の絵を桑名盆に描かせて将軍に献じたことに由来します。

高台の中央には朱漆で「翠松」の署名があります。



イジイジ塗桑名薄盆 六代 山本翠松塗 現代

式年遷宮記念せんぐう館蔵 平成二十四年献納

口縁径二十四・〇cm 高さ二・〇cm

外縁を朱漆で縁取りして、縁下より面際にかけては、

青漆できめ細かい波紋様を塗り出す変塗り「イジイジ

塗り」が施されています。

「イジイジ塗り」は漆塗りの中の変塗りの一つで「イジ

塗り」「石目塗り」ともいわれます。

現在、山本翠松氏は江戸時代以来の「イジイジ塗桑名

盆」の姿を再現製作し、平成十二年に三重県指定伝統

工芸品となり、平成十七年には桑名市無形文化財（漆

工芸）に認定され、その技術と技法を守り伝えていま

展示資料一覧

資料名	製作年代	作者	所蔵先
岩戸茶碗	明治		神宮徴古館蔵
間の山振舞茶碗	明治		神宮徴古館蔵
伊勢春慶箱	昭和三年		個人蔵
伊勢根付草履に蝦蟇	明治	鈴木正直作	神宮徴古館蔵
釣瓶に蝦蟇	昭和	三宅正直作	神宮徴古館蔵
擬革紙煙草入	江戸時代	三忠製	個人蔵
擬革紙紙巻煙草入	大正	三忠製	個人蔵
擬革紙巾着	現代	擬革紙の会作	擬革紙の会蔵
擬革紙煙草入	現代	堀木茂作	個人蔵
擬革紙名刺入	現代	堀木茂作	個人蔵
神路山焼岩戸茶碗	昭和	神山一三作	神宮徴古館蔵
神路山焼剣先祓小碗	昭和	神山一三作	個人蔵
神路山焼徳利	昭和	神山一三作	個人蔵
神路山焼茶碗「神光」	昭和	即中斎書・神山一三作	個人蔵
神宮窯暦手茶碗	昭和	今村仙風作	神宮徴古館蔵
御絵付茶碗	昭和	北白川房子祭主絵付・今村仙風作	神宮徴古館蔵
「大祓詞」鉄筆竹柱掛	昭和三十二年	今村仙風刻	倭姫宮蔵
五十鈴焼焼締水指	昭和	森下木二作	神宮徴古館蔵
五十鈴焼水碗形茶碗「神路山」	大正七年	竹内栖鳳元絵・森下木二作	個人蔵
二見焼神宮古印釣瓶花入	昭和	清水石仙作	個人蔵
宇治橋擬宝珠香合	昭和	坂口晴風刻	神宮徴古館蔵
宇治橋古材茶器「五十鈴川」	昭和	坂口晴風刻	個人蔵
桑名薄盆	現代	六代山本翠松塗	せんぐう館蔵
イジイジ塗桑名薄盆	現代	六代山本翠松塗	せんぐう館蔵

主要参考文献

- 『岩出甫石雜記』
擬革紙煙草入資料館三忠パンフレット
川合東皐『東皐文庫書画文房図録』平成十六年十二月 陶玄社
『伊勢市史』第七卷文化財編 平成十九年三月 伊勢市
『伊勢郷土史草』第十五号 昭和五十三年四月 伊勢郷土史草編集委員会
『伊勢郷土史草』第二十六号 平成三年八月 伊勢郷土史草編集委員会
『伊勢郷土史草』第二十九号 平成七年四月 伊勢郷土史草編集委員会
『伊勢郷土史草』第三十四号 平成十二年九月 伊勢郷土史草編集委員会
『伊勢根付正直の世界』第三回秋季特別展 平成元年十月 伊勢市郷土資料館
『桑名市史』本編 昭和六十二年四月 桑名市教育委員会
影印校注『久波奈名所図会』中巻 昭和五十二年七月 久波奈古典籍刊行会
郷土資料の研究『桑名の伝統・文化』紀要第六十集 平成元年三月 桑名市教育研究所

平成二十五年度企画展示
参宮みやげ―神宮に寄せる思い―
編集・発行 式年遷記念せんぐう館
〒五一六―〇〇四二
三重県伊勢市豊川町前野一二六―一
☎〇五九六―二二―六二六三
無断の複製・転載を禁じます。

